「タイランド・ビエンナーレ・チェンライ 2023」視察報告書

2023 年 12 月 25 日
文責／画像撮影：飯田志保子

視察期間： 2023 年 12 月 7 日（木）-12 月 11 日（月）
出張先： チェンライ、タイ
出張者： 飯田志保子（キュレーター）

1. 「**タイランド・ビエンナーレ・チェンライ 2023**」（会期：2023 年 12 月 9 日-2024 年 4 月 30 日）

【旅程／訪問先】

12/7（木）日本発、チェンライ着

＊アンダーラインはビエンナーレ主会場、参加アーティスト、公式オープニング・セレモニー。他はビエンナーレの一環として開催されている「パビリオン」企画。NCAR が支援した日本の作家は漢字の氏名を併記した。

＊文中のアーティストおよび関係者の氏名敬称略。

12/8（金）

- **CIAM: Chiang Rai International Art Museum** (Artists: all (zone)/Rachaporn Choochuey, Almagui Menlibayava, Haegue Yang, Maria Hassabi, Movana Chen, Pierre Huyghe, Precious Okoyomon, Sarah Sze, Somlak Pantiboon, Tobias Reberger, Tuguldur Yondonjamts, Wang Wen-Chih, Xin Liu) Tour by the Curatorial Team 画像①②③④⑤⑥
- Sawanbondin Tea House & Experience (Pavilion by PLUVIOPHILE) ⑦⑧
- **The Old Chiang Rai City Hall** (Artist: Michael Lin) ⑨
- RJJ building "Don't be afraid to walk alone: Deliberating drawings, lines, marks and borders" (Pavilion by RUBANA) ⑩⑪
- **Tobacco Warehouse** (Artists: Arto Lindsay, Atta Kwami, Maria Thereza Alves, **島袋道浩 Shimabuku,** Tomas Saraceno) ⑫⑬⑭
- **Chiang Rai Railway Library** (Artist: Poklong Anading) ⑮
- The former Wiang Thong Bookstore "Point of No Concern: return to the rhizomatic state" (Pavilion by MAIIAM) ⑯

①

②

③

④

⑤

⑥

⑦

⑧

⑨

⑩

⑪

⑫

⑬

⑭

⑮

⑯

12/9（土）

- **Mae Fah Luang Art and Cultural Park** (Artists: Tarek Atoui, 木戸龍介 **Ryusuke Kido**, Tayeba Begum Lipi, Ernesto Neto, Citra Sasmita, Nguyen Trinh Thi, Haegue Yang) ⑰⑱⑲⑳
- **Black House (Baan Dam Museum)** (Artists: Busui Ajaw, Chakaia Booker, Kamonlak Sukchai, Soe Yu New) ㉑㉒
- **Mekong Basin Civilization Museum** (Artists: Boedi Widjaya, Ubatsat, Wit Pimkanchanapong) ㉓㉔㉕
- Singhaklai House, Mod Chana Phai Foundation (Pavilion by Zomia in the Cloud) ㉖
- **Chiang Rai International Art Museum (CIAM) for the Opening Ceremony** (Guests: **Mr. Srettha Thavisin,** the Prime Minister; Deputy Prime Minister, **Mr. Sermsak Pongpanit,** the Minister of Culture; Permanent Secretary for Culture; Executives of the Ministry of Culture; Governor of Chiang Rai; Executives of relevant agencies; Diplomatic Corps; Organizing Committee and Participating Artists) ㉗㉘

⑰

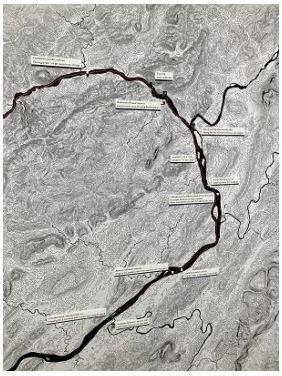
⑱

⑲

⑳

㉑

㉒



㉓

㉔

㉕ ㉖ ㉗ ㉘

12/10（日）

- **Chern Tawan International Meditation Center (**Artists: Korakot Aromdee, Chata Maiwong, Sanitas, Pradittasnee, Arin Rungjang, Zen Teh) ㉙㉚㉛
- **Chiangsaen National Museum** (Artists: Chitti Kasemkitvatana, Kader Attia, Roongroj Paimyossak) ㉜
- **Ancient Monument No.16** (Artist: Baan Noorg Collaborative Arts and Culture**)** ㉝
- **Wat Pa Sak (**Artist: Chitti Kasemkitvatana**)** ㉞
- **Huai Kiang Warehouse** (Artists: Cheng Xinhao, Ho Tzu Nyen, Nipan Oranniwesna, Pablo Barthlomew, Pangrok Sulap, Tcheu Siong, Wantanee Siripattananuntakul, Sawangwongse Yawnghwe**)** ㉟㊱㊲
- **Baan Mae Ma School** (Artist: Apichatpong Weerasethakul**)** ㊳
- **Golden Triangle Activity Area** (Artist: ナウィン・ラワンチャイクン **Navin Rawanchaikul & StudiOK)** ㊴
- **Wiang Digital Community Center** (Artist: Hsu Chia-Wei) ㊵

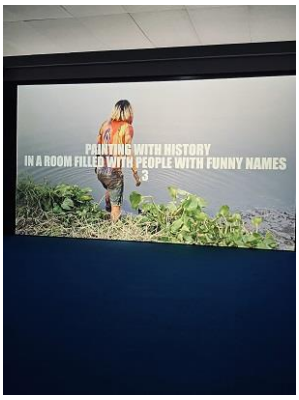
㉙ ㉚ ㉛ ㉜

㉝ ㉞ ㉟ ㊱

㊲ ㊳ ㊴ ㊵

12/11（月）

- **<u>Wat Rong Khun (White Temple)</u>** <u>(Artists: Korakrit Arunanondchai, Tsherin Sherpa)</u> ㊶㊷㊸



㊶ ㊷ ㊸

【ビエンナーレとしての評価】

2018 年にタイ文化省現代美術文化室（Office of Contemporary Art and Culture, Ministry of

Culture）が設立した「タイランド・ビエンナーレ」の第 3 回目となる「タイランド・ビエンナーレ・チェンライ 2023」（TBC 2023）は、タイ北部のチェンライとチェンセーンの二つの地域（18 主会場および 14 パビリオン）で開幕を迎えた。2 名のアーティスティック・ディレクターと 2 名のキュレーター、計 4 名からなる学芸チームは「オープン・ワールド」をテーマに掲げ、60 名／組のアーティストを招待。そのうち日本からは、木戸龍介、島袋道浩、ナウィン・ラワンチャイクン＆StudiOK の 3 組が招待作家として参加した。

全体的な所感としては、タイと東南アジアのアーティストは勿論のこと、東アジア、南アジア、北米、南米、ヨーロッパを拠点に国際的な活躍が目覚ましい中堅作家が多く参加し、地元作家が建設したユニークな寺院、私設美術館、庭園などの各会場で見ごたえあるサイト・スペシフィックな大型作品が目立った。タイの作家のなかでは、チェンライの地元作家、バンコクなど都市出身者、アカ族のアーティストなど、若手作家から地元では知られた大御所までを含み、タイのアーティストの厚みと、60 名／組のなかで多角的にみてバランスのとれたラインナップであった。それには、アーティスティック・ディレクター2 名が国際的に豊富な実績と人脈をもつアーティスト（リクリット・ティラヴァニ）とキュレーター（クリッティヤー・カーウィーウォン）で、実力あるアーティストの招聘を可能にしたことと、学芸チーム 4 名ともタイ北部出身である（または縁がある）ことが、地域に根差した作家と会場選定、協力体制づくりを可能にし、サイト・スペシフィックな数々の作品の実現に寄与したことが窺える。チェンライ国際美術館（CIAM）まで建設したチェンライの名士でもある物故作家（タワン・ダッチャニー）と現存作家（チャルムチャイ・コーシッピパット）の多大な貢献と、その弟子筋にあたる複数の作家が設営現場に従事しているという話からは、チャンライのアートコミュニティの力強さと TBC 2023 に懸ける意気込みを感じた。

とりわけチェンセーンを主会場のひとつにし、複数の優れた新作が生まれたことは称賛に値する。タイ、ミャンマー、ラオスが国境を接するゴールデン・トライアングルは、かつて世界最大のケシの栽培地帯だったことでも知られる。長年、経済的にも政治的にも各国の思惑が交差してきた複雑さ極まる領域でありながら、現在では雄大なメコン川とリゾート開発の対比が強烈な観光地として栄えている。メコン川流域の地政学や自然をテーマにした数々の作品によって、メコン川が象徴する時間や人々と自然の関係から、リゾート地の華やかさの裏にある国境の緊張関係や生態系の危機に至るまで、タイ（北部）の歴史的・文化的、そしてキュラトリアルなテーマの奥行きが複数会場をまたいで見事に表出されていた。チェンライ中心地だけの事業展開では牧歌的なアートツーリズム型ビエンナーレの印象に終始したかもしれない点において、二つの地域を対置したことはおそらく学芸的な意図だろうと推察される。それがまさしく、アーティストが新作の着想を得るうえでも事業設計としても功を奏していた。これらによって、13 世紀から今日まで続くタイ北部の豊かな伝統を参照しながら、現代アートを通して今日のグローバルな諸問題を世界と共有し、多民族が暮らす地域社会にもそれらを開く「オープン・ワールド」のテーマが現化されていた。

さらに、国、美術機関、大学、アーティスト・コレクティブの単位で参加する 14 の「パビリオン」がビエンナーレの一環として設けられ、それぞれ小規模だが企画意図と焦点がしっかり伝わるテーマ展になっていたことも、開かれた参加機会の創出に寄与していた。

オープニング時のツアーは、連日タイ国内ならびに海外から訪れた美術関係者やプレスで国際色豊かな賑わいを見せていた。なかでも日本からの関係者はとりわけ多かった。参加アーティスト直接の関係者のみならず、東京藝術大学関係者、同大学主催の視察旅行で訪れた教員と学生、国際交流基金、アーツカウンシル東京といったアートセクター関係者、芸術公社のスタッフなど、おそらく20-30名は訪れていたと思われる。個人で訪れていた学芸員やキュレーターの方が少ないぐらいで、海外の他の主要なビエンナーレのオープニングでは見たことがないような人数だった。日本から渡航しやすい距離、治安の良さ、物価の安さといったことも足を運ぶ要因になったと思われるが、参加アーティストの発表は間際だったことから、アーティスティック・ディレクターに対する事前の期待値と、ビエンナーレ自体の国際性およびポテンシャルの高さが窺える。

上記のことから TBC 2023 は、事業内容、アーティスティック・ディレクターおよび参加アーティストの選定、作品の充実度、地域の参画と評判の点で、高い評価に値する現代アートの国際的なプラットフォームといえる。

ただし運営面では、どのビエンナーレにおいても開幕前後はある程度仕方のないこととはいえ、かなりの混乱が生じた。ツアーのスケジュールが日々刻々と変わり、内部に知り合いがいない限り進捗情報を得るのに困難な状況であった。主催者がオープニングの 4 日間に用意したミニバンは各日50台から100台近くあったと聞くが、多くの運転手はバンコクから来ているため道が分からず、通訳アプリを駆使して会場間を移動したり待ち合わせをしたりする難易度が高かった。また、ツアー時には設営中の作品も各会場で散見され、インストーラー不足のためパビリオンの設営は後回しにされているという声も聞いた。

会場間はいずれも車で 10 分から 30 分（チェンセーンまではチェンライから 2 時間）の距離で、全体を見るには 3-4 日を要する広域の規模である。会場間を移動する車と運転手、道案内、会場探し、食事の注文などにタイ語でのコミュニケーションをサポートする人材または通訳アプリが必須であることを付記しておく。これらの点で、海外からの訪問者には難易度が高いビエンナーレであることは否めない。会期中、そして次回以降の受け入れ態勢が改善されていくことを期待したい。

一方、そうした混乱の最中でも、寛容さか諦めか分からないが、誰もが流れに身を任せるしかないとでもいうような大らかさが感じられ、もしかすると緻密で厳格になりがちな日本の芸術祭や公式イベントにとっては、人々が生きやすさを感じる寛容な社会にするために、多少は見習うべき姿勢であるかもしれないと思った。

【日本からの参加アーティストの評価】

・木戸龍介：

チェンライの Mae Fah Luang Art and Cultural Park で 2 か月間の滞在制作を行った木戸龍介は、公園に既存の木造の米納屋を丸ごと彫刻した *Inner Light – Chaing Rai Rice Barn –* を制作。地元の職人とのコラボレーションで制作された本作は、双方の高度な木彫技術で内外に光が通過する造作と装飾を施し、古い納屋に新たな命を吹き込んだ。木戸は当初、長らく保存されてきた米納屋に手を入れることに公園の管理者や地元コミュニティの賛同が得られるか懸念したというが、

職人と翻訳アプリを介して日々コミュニケーションを行い、制作を通じて信頼関係を築き、最後には職人の方から屋根も新たなものに変えようと提案が出るまでに至ったという。毎日見た事がないような地元の家庭料理の昼食を職人と共にしたエピソードを嬉しそうに話す木戸の姿も印象的だった。

木戸は、NCAR を含む複数の支援によって納屋の購入、長期滞在、記録映像の制作が叶い、完成した作品は恒久設置として公園に残ることとなった。作家の独自性を他者に開き、地元のコミュニティにオーナーシップをもたらす作品ができたことは、何にも増して評価される。TBC 2023 のテーマ「オープン・ワールド」を木戸なりの方法で見事に体現したといえよう。滞在制作を経てすっかりチェンライ・コミュニティの一員となった木戸の人気ぶりと、今後も作品のメンテナンスの心配がない信頼関係を職人と築いたその努力は、NCAR の支援に十二分に値する成果をあげた。ビエンナーレ初参加となる木戸にとっても、タレク・アトゥイ、エルネスト・ネト、ヤン・ヘギュといった国際展常連のアーティストと同じ会場で展示することで、申し分ない国際デビューの機会となったといえよう。

・島袋道浩：

島袋は、学芸チームと参加アーティストがひとりずつ正面を向いて直立した姿の絵を複数の絵描きに依頼し、それを用いた人型の凧を制作。事前に 2 度凧あげをした映像とともに、*We are flying* の新作として旧タバコ倉庫の会場に展示した。壁面にはワークショップの参加者がそれぞれの姿を描いた凧も展示され、会期後半にもう一度凧あげが予定されている。

写実的でリアルな模写からややラフな描き方まで、バラエティのある人型の凧が空にひらひらと泳ぐ様はユーモラスで詩的であり、実物の凧の展示と映像を行き来して見比べる来場者の笑顔を誘う。空を泳ぐ凧は自由の象徴のようでありながら、時折、領空や国境の緊張関係が糸を引く世界の現状が脳裏によぎる本作は、のんびり牧歌的な側面と、その背後に潜む気配を醸し出していた。

作品自体は安定の出来栄えに見えたが、ツアー前日にようやく仮設壁が建ったため展示の完成が間に合わなかったこと、度重なるスケジュール変更の情報が参加アーティストにも行き届いてい

ない状況、そしてビエンナーレ主催者の予算執行手続きの煩雑さと承認までにかかる時間に島袋は苦言を呈していた。NCARの支援についても、対象となる費目など改善を求めたい点があると話していた。島袋は世界の主要なビエンナーレに多数参加経験がある優れたアーティストで、国際的な知名度も人気も高い。今回のように若手と並んで招待されることは、日本の現代アートの存在感を高めるにあたり、作家の層の厚みを示すうえで相乗効果が見込め、望ましいことである。

・ナウィン・ラワンチャイクン＆StudiOK：

ラワンチャイクンと彼のチームの新作が展示されたチェンセーン会場は、先述の通り、当該地帯の複雑な地政学・経済・自然環境との相乗効果で TBC2023 のハイライトのひとつとなっていた。多くの作品がそうした背景を反映していたなかで、ラワンチャイクンは、彼がこれまでも世界各地で手掛けてきたように、地元民の集団肖像画描いた大型看板とそのプロセスの新作ドキュメント・フィルムをメコン川沿いの屋外広場に展示した。夜市が立ち並び、地元の人々や観光客が集うアクティビティ・エリアとしてのゴールデン・トライアングルの側面を表出し、まちと人々を活気づけプレース・メイキングとして作品が機能していたことが印象深い。

【NCAR による支援について今後の可能性と課題】

タイランド・ビエンナーレは、過去 2 回の開催実績があることと TBC 2023 の内容に鑑み、日本の作家の参加を後押しすることで、日本の現代アートの国際的な存在感を高めることを意図した NCAR の支援対象として相応しいビエンナーレであると思われる。

今後の可能性については、毎回地域が異なることから、各回の開催地域選定と学芸チームの構成次第である。安定した開催実績を重ねていくことを継続的に見守りたい。

課題として 2 点あげると、ひとつは NCAR とビエンナーレ事務局の事前の連絡調整が円滑にいかなかったことや作家からの苦言を踏まえ、主催者側の運営体制の改善が求められることである。もうひとつは、招待参加ではない日本の参加者に対する支援をどのように考えるか、検討の余地があることである。今回の事例では、パビリオンとして参加した Production Zomia が日本の主催者（藪本雄登）による企画であり、タイ、ラオス、ミャンマーのアーティストと複数の NGO が参加していた。ゴールデン・トライアングル地帯の先住民の表現者にも焦点を当てた意欲的な内容だったが、手弁当ゆえにできることが限られてしまう様子が窺えた。ビエンナーレ主催者側で招待作家の枠と、連携や自主参加の枠組みを設けている場合に、こうした企画が主催者から NCAR への申請に含まれないことが想定される。評価される内容の企画やアーティストだった場合に NCAR から主催者にある程度働きかけをするべきか主催者に委ねるべきか、今後の検討課題として提起しておきたい。

会場マップ（左｜チェンライ　右｜チェンセーン）、市街地のバナー、会場近くのサイン。掲出数と視認性は十分。

以上